



プレイセラピー・乳幼児心理臨床における情緒的関わり合いに関する研究

生活環境科学系・臨床心理学領域

黒川 嘉子 准教授 KUROKAWA Yoshiko 博士(教育学)(京都大学)

■研究キーワード プレイセラピー(遊戯療法),乳幼児心理臨床,移行対象概念,心理臨床における「遊ぶこと」,発達障害

■主な所属学会 日本心理臨床学会,日本遊戯療法学会,日本箱庭療法学会,日本乳幼児医学・心理学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.39a6340302e35de9520e17560c007669.html>



研究者総覧

研究概要

言葉をもたない(話さない)存在infantである乳児が、養育者などの他者との関係性において、どのように一人の人として固有の心的世界を築いていき、体験を物語る存在となっていくのかというテーマのもと、子どもの情緒的体験世界と心理療法について研究および臨床心理実践を行っています。子どもが育つ／子どもを育てる環境が変化するなかで、長期的な視点で心身の健康に寄与する子どもと養育者への心理臨床に取り組んでいます。

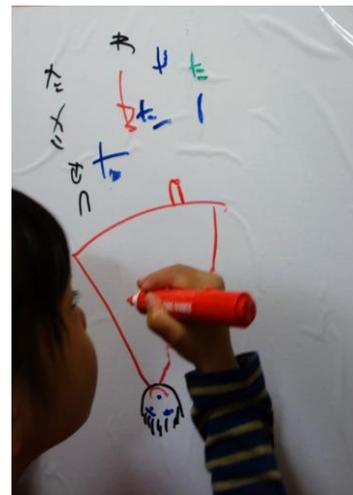
1. プレイセラピー(遊戯療法)による子ども表現や語りnarrativeの探求と心理支援の検討
2. 乳幼児－養育者、クライアント－セラピスト間における情動調律(Stern, 1985)などの情動的共有体験の検討
3. 発達障害に関わるアセスメントと心理支援の検討



プレイセラピーにおける子ども心の表現例



お気に入りのくまさん(移行対象)



「わたし」 3歳8か月児

アピールポイント

1. プレイセラピーは、ただ遊んでいけば元気になる、遊びで発散するというものではなく、セラピストとの信頼関係、場と時間の安定といった心理療法の枠組みの中で、遊ぶことを通して不安や恐怖、怒りや傷つき、さらには「自分とは」という実存的な問いを表現し、子ども自身が心理的な問題と向き合い、成長発達のプロセスを歩んでいきます。それは、空想と現実のどちらにも属し、どちらかと問われない中間領域における体験(Winnicott, 1953)であり、被虐待、被災、発達障害やその他の障害、身体疾患、家族の問題などで困難さを抱える子どもにとって、安心して遊ぶことによる語りが可能になります。そうした心の声を聴き、心理的支援を行うために、子どもの情緒的体験の探求や治療的かわりの検討を行っています。

2. 乳幼児期において、発語や言語発達の遅れ、場面緘黙や吃音、言葉によるコミュニケーションの難しさなど、質や程度、背景は多様ですが「言葉」をめぐる問題は重要なテーマです。言葉の意味理解による関わり合いの前に、子ども特有のことばやオノマトペなど音を感じる身体感覚を通じた関わり合いに着目し、情動的な共有が言葉での関わり合いの下地になる「共にいる」体験につながることを検討しています。父親も含めた養育者と乳児の情動調律の検討は、これからの子育て支援に活かされると考えています。

3. 発達障害の早期発見、早期発達支援の取り組みにおいて、グレーゾーンの問題や、周囲の人や環境との関係性によって臨床像や適応の状態が異なる経過をたどることから、その親子、家族のライフコースへの影響など長期的視点をもった包括的アセスメントと心理支援について検討をおこなっています。1や2の研究から、発達障害特性への理解を深めると同時に、関係性を育む心理支援へと展開できるものとして取り組んでいます。